

Bangladesh南部避難民救援事業（第四班 事務管理要員）報告

国際医療救援部 国際救援課 李壽陽
(派遣期間：2018年1月5日～2月22日)

2017年8月25日のミャンマー・ラカイン州での武力衝突を機に多くの人々が避難民となり Bangladeshへ流入しました¹。2018年2月25日時点でその数は67万人に達したとの報告があります²。日本赤十字社（以下、日赤）は、この人道危機に対して緊急救援チーム（ERU）を2017年9月中旬から派遣しており、わたしはその第四班の一員として2018年1月5日から2月22日まで Bangladesh南部のコックスバザールに派遣され、避難民キャンプでの活動に携わりました。



避難民キャンプの様子 (1)

¹ 国際赤十字では、政治的・民族的背景および避難されている方々の多様性に配慮し、『ロヒンギヤ』という表現を使用しないこととしています。

² Inter Sector Coordination Group (ISCG), Situation Report: Rohingya Refugee Crisis- Cox's Bazar 25 February 2018

<https://www.humanitarianresponse.info/en/operations/bangladesh/document/situation-update-rohingya-crisis-coxs-bazar-25-february-2018>



避難民キャンプの様子 (2)

緊急救援活動における事務管理要員の役割は多岐にわたります。一言でまとめると円滑な活動展開を支えることですが、具体的には、通信機器や資機材の管理、車両手配、お金や現地スタッフ・ボランティアの管理、離着任する要員や訪問者の宿泊移動にかかる手配、セキュリティプランの整備、関係機関との調整、広報……など、ここに挙げるだけでもその業務の幅広さが伝わると思います。

上記のような業務のなかでもわたしは現地スタッフ・ボランティアの管理を主に担当しました。 Bangladesh Red Crescent Society (以下、バ赤) スタッフ 19 名、コミュニティボランティア 51 名の計 70 名の現地スタッフ・ボランティア。彼らの勤怠・休暇管理、給与・日当支払といった日々の業務をバ赤フィールドマネージャー、ボランティアフィールドコーディネーターと協力しながら行いました。



朝の出欠確認



ボランティアの週間予定を確認

また、前班で増員した現地スタッフの雇用条件の整理、現地スタッフ・ボランティアへのオリエンテーションの実施、ポロシャツといった活動に必要な物品の配布に向けて、バ赤側との調整に関わりました。

さらには、現地スタッフ・ボランティアに第四班日赤要員約 25 名を含めた大人数のチームがどのようにすれば避難民キャンプという環境下で日々の活動をより効果的に実施できるのか、今後の日赤の活動方針を見据えて（ゆくゆくはバ赤への活動移譲を意識して）これからどのように人員体制を整備していくのが望ましいか、といった課題に 7 週間向き合い頭を捻りました。

英語、日本語、ベンガル語、そして避難民の言葉が飛び交う避難民キャンプでの活動、そのなかで現地の方々のマネジメントに携わることはとても刺激的であると同時に配慮も要しました。ホストコミュニティと避難民の方々、そして日赤。今回の活動に関わるチームの構成員（総勢約 100 名）は、背景や立場、考え方に違いはあれども、避難民キャンプでのニーズに応えるために一つの大きなチームとして人道支援活動に携わっていました。チームとしての意識の向上に繋げるためには具体的にどのようにすればよいのか、活動期間中には悩み試行錯誤しました。



朝のミーティングの風景

これほど多くの人に関わり救援活動を実施していたため、次第に表面化する問題もしばしばありました。人間関係のトラブルもあれば、度重なる昇給のリクエストもありました。望ましい解決策について、その都度悩みながらも、まずは何よりも対話をとおしてできるだけ「声」に耳を傾けるように意識しました。すると、こちらの考え方では思いつかないような理由を話すので、「そんな考え方があるんだ」と妙にこちらが納得させられることがあったり、慎重に言葉を選びながら一つ一つ事実確認をする必要に迫られることがあったりと、今回の派遣期間中にも人との関係からは実に多くの発見と学びがありました。

た。必要に応じて関係者や各部門リーダーを巻き込み、可能な限りですが丁寧な対応を心がけました。

日赤が海外で緊急救援活動を実施するにあたり現地スタッフ・ボランティア、そして地域住民の方々のサポートは欠かせません。先の見えない生活、困難な環境下でありながらもこの活動を理解し、毎日真摯に携わる現地の方々の姿には頭が下がります。

避難民の方々が一日も早く不安なく暮らすことができるよう切に願うとともに、日本赤十字社の国際活動へ多大なるご理解、ご支援を賜り感謝申し上げます。





集合写真